

私たちを隔てるもの

山形県立左沢高等学校 三年 齋藤 裕莉亜

高校三年生の農業の授業の「草花」という科目で大江町の楯岡特別支援学校大江校に行き、支援学校の生徒と一緒に花を植えるという交流をしました。私は支援学校の生徒と交流すると聞いたとき、ネガティブなイメージを持ちました。もしかしたら会話が成立しないのではないか、話しかけても答えてくれないのではないか、してほしい事と違うことをしてしまうのではないか、このような不安でいっぱいのまま当日を迎えました。

私たちの学校の生徒は、支援学校の学年ごとに担当分けがされました。私は支援学校一年生の女の子を担当し、ポットに入っていたマリーゴールドの花を花壇に植える作業をすることになりました。最初に自己紹介をしました。彼女は名前や好きな人やグループを紹介してくれましたが、彼女は外見からはどんな障害があるのかまったくわからないし、話し方も高校の友人と何も変わりませんでした。それでもまだ私は相手が支援学校の生徒であることに身構えており、この先順調に作業をすることができるのか不安なままでした。しかし花植えが始まると、彼女は私が言ったことや説明したことをきちんと理解してまっすぐに応じてくれました。花植えに関係のない雑談も、話しかけると笑顔で応えてくれました。私は素直に楽しいと感じました。事前の不安は完全に解消され、先入観を持っていたことさえ忘れてしまうほど交流活動を満喫しました。

私は障害者を差別したり特別扱いしたりしようとするつもりはなかったのですが、交流する前の不安は、無意識の偏見から来たものなのだと思います。障害を持っている人と触れ合う機会が今までなく、障害者だからこうだろうなど固定的な概念といった悪いイメージ

の先入観で勝手に不安に思っていた自分を恥じました。また、この交流活動中に、私は自分の良さに気づかせてもらうことができました。支援学校の先生と生徒は、私のことを優しいと言ってくれました。支援学校の生徒に対してだからではなく、また障害がある人と接したからでもなく、私は楽しかったから友人と一緒に授業でマリーゴールドを植えたときのように当たり前に過ごしただけです。そういう普段通りの自分を優しいと評価してもらえたことが嬉しかったし、進路活動や社会人になってから私を支えてくれる武器になる強みだと気づきました。

私と彼女は、楽しく花植えをしたいという気持ちと一緒にです。学年は違うけれど、二人とも大江町の学校の高校生です。違うのは、環境や学ぶ中身であって、人として大きな違いはありません。「先入観」、「偏見」、「不安」は、何も変わらない二人を分けてしまう要らないもので、これこそが障害物だと感じました。私はどんな人でも平等に触れ合うことは大切だと改めて学びました。今まで知ることでできなかった自分の良さに気づかせてもらいました。いつも通りに過ごすことは、相手が日頃感じるストレスを感じることなく過ごせるので優しく感じます。どんな人にも私の優しさを向け続けたいです。